様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００１９０

研究課題名（和文）江戸時代の俳諧文化における画家・絵画評価とその画壇への影響の研究

研究課題名（英文）Evaluations of painters and paintings from the viewpoint of haiku culture in the Edo period and their effects on the art world

研究代表者
馬渕　美帆（MABUCHI, Miho）

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：６０３２３５５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：英一蝶、尾形光琳などの画家が、18世紀以降の俳諧文化において高い評価を得ていたことがわかった。一蝶の上方での評価について初めて本格的に検証し、弟子・英一蜂による一蝶の画譜『画本図編』の出版、及び与謝蕪村の活動が、上方での俳諧的な一蝶評価・受容に重要な役割を果たした様相を解明した。俳諧文化の評価体系に基づき、一蝶画が時代と場所を隔てて白隠慧鶴や曾我蕭白の絵画に利用されたことも明らかにした。一蝶と光琳の関わり、一蝶筆《涅槃図》の注文主、蕭白の若年の作画活動についての資料なども新たに指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
江戸時代の俳諧文化における画家・絵画の評価体系を明らかにし、それが江戸時代絵画の主要な部分に大きな影響を与えたことを指摘することで、江戸時代絵画研究にとっての俳諧文化という視座の重要性を示した。特に、英一蝶の上方での評価について初めて本格的に検証し、江戸における一蝶評価の検証と併せて、俳諧文化における一蝶・一蝶画観と評価の様相の総体を解明した。本研究は、殊に一蝶・一蝶画の受容史研究、『画本図編』を中心とした英一蜂、また白隠慧鶴、曾我蕭白らの画家研究に資する所が大きい。

研究成果の概要（英文）：I clarify that painters including Hanabusa Itcho and Ogata Korin were highly evaluated in haiku culture after 18th century. I investigate how Itcho was evaluated in Kyoto and Osaka and reveal that Itcho was esteemed as a haiku painter, owing to publication of Itcho's painting book "Ehon zuhen" by his disciple Hanabusa Ippo and activity of Yosa Buson. I also clarify that Hakuin Ekaku and Soga Shohaku referred to Itcho's works when they made their paintings in the context of evaluation a la haiku culture of painters. I newly point out the relationship between Itcho and Korin, specify the client of Itcho's "Nehan zu (The Death of the Historical Buddha)", and find the document that provides information about young Shohaku's activity.

研究分野：日本中近世絵画史

キーワード：江戸絵画　俳諧文化　曾我蕭白　英一蝶　英一蜂　白隠慧鶴　尾形光琳　与謝蕪村

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

俳諧は、江戸時代を通じて社会の上層部から庶民、都市部から地方まで、広く行われた文芸である。それは地域を超えて多彩な人的交流をもたらし、文学の枠に止まらず、俳諧的価値観の下に俳諧文化と呼べる文化の総体を築き上げた。江戸時代の文化を理解する上で、俳諧文化の存在は無視できない重要なものであり、それは絵画の分野でも同様である。それにも拘わらず、江戸時代絵画の展開に俳諧文化が果たした役割についての美術史側からの研究は十分なものでなかった。

従来、俳諧文化との関わりについては、主に自ら俳人でもあり俳画もよくした一部の画家の作家論・作品論の中で限定的に論じられる状況が続いており、かつ、与謝蕪村（1716-83）を例外として、俳諧文化が各画家の代表的な作品の造形に及ぼした影響を具体的に考察する視点には大いに発展の余地があった。さらに、俳諧文化が江戸時代絵画の主要な部分にどのように関わっているのかについては、目立った論点とされていなかった。

研究代表者は、江戸時代絵画をより実態に即して捉えるためには、俳諧文化との関わりの解明が欠かせないという認識の下に本研究を開始した。江戸時代絵画の展開に俳諧文化が果たした役割を総合的に明らかにする、という問題意識に基づき、本研究では、俳諧文化における既存の画家や絵画に対する評価の様相と、その評価体系が江戸時代絵画全体に与えた影響との解明を、学術的な「問い」として設定した。

２．研究の目的

本研究の目的は、大きく分けて次の二点である。

①江戸時代の俳諧文化において、どのような画家や絵画が高く評価されていたのかを、その理由と共に総合的に明らかにする。関係資料が多く、また既存の画家が体系的に把握されるようになった、18 世紀以降の俳諧文化を研究対象とする。

② ①で明らかにした俳諧文化の評価体系が、俳画などに限らず、広範な江戸時代絵画の制作に重要な影響を及ぼしている様相を、画家や作品に即して具体的に解明する。

本研究は、江戸時代絵画への俳諧文化の影響について考察する手段として、既存の画家や絵画に対する、俳諧文化に特有の評価体系の存在とそのあり方に着目し、それが江戸時代絵画全般に与えた影響を考える点が独自である。本研究の目的の一部については、研究代表者の先行論文〈引用文献１・2〉において、尾形光琳（1658-1716）・光琳画への高い評価とその伊藤若冲や中村芳中の絵画への影響の事例に関して既に明らかにしており、本研究はその他の多くの例について総合的な解明を目指すものである。俳諧文化の評価体系という視点を導入することで、俳人ではない画家の本格的な作画に対する俳諧文化の影響の大きさ等も指摘でき、美術史では限定的に扱われるに止まってきた俳諧文化の役割を根本的に認識し直すことにつながる。

３．研究の方法

上記の「研究の目的」①の達成のために、18～19 世紀の俳諧関係の文献及び俳画、絵俳書、俳諧一枚摺等について、広く資料収集と実地調査を行い、それらの中に既存の画家や絵画が様々な形で現れる事例を集めて、その評価の様相について検討する。かつ、現れる各画家や絵画についての資料収集・調査も行い、それらのどのようなあり方が先の評価に結び付いたのかを、背後にある論理と共に検証し、当時の俳諧文化における評価体系として明らかにする。研究代表者のこれまでの研究により、俳諧文化において高く評価されていたことが想定される、尾形光琳、松花堂昭乗、英一蝶（1652-1724）などの画家に重点を置き、他の画家に目配りしながら作業を行う。

並行して「研究の目的」②の達成のために、上記で明らかにした俳諧文化における既存の画家や絵画への評価が、制作において影響していると考えられる江戸時代絵画の具体的な事例について、資料収集・実地調査を行い研究する。

４．研究成果

本研究全体を通じ、「研究の目的」①については次のようなことがわかった。著名俳人や俳諧を好む受容層との直接的な関わり、また自身の歿後に後継的役割を果たした画家・芸術家達と俳人達との密接な関わりに基づき、特に英一蝶、尾形光琳などが 18 世紀以降の俳諧文化において高い評価を得ていた。彼らの歿後の英派の画家達や、光琳の弟である尾形乾山らは、特に江戸の俳人社会と深く関わりながら、一蝶画や光琳画の中でも、俳人が好む軽妙で俳諧的な要素を積極的に提示し、俳諧文化における彼らの評価を確立するのに大きな役割を果たしたと考えられる。一蝶については、従来、京都・大坂の上方方面での評価に関する研究は皆無であったが、本研究では上方を中心とする地域に重点を置いて検討し、一蝶の弟子である英一蜂（1691-1760）によ

る一蝶の画譜『画本図編』の出版、及び与謝蕪村の活動が、二つの柱として、上方における一蝶評価・受容に重要な役割を果たしていたことを明らかにした。江戸における一蝶評価の検証と併せて、俳諧文化における一蝶・一蝶画観と評価の様相の総体を解明することができた。

「研究の目的」②については、本研究では、俳諧文化の評価体系に基づき、江戸の画家である一蝶の絵画が、時代と場所を隔てて禅僧・白隠慧鶴（1685-1768）や京都の画家・曾我蕭白（1730-81）の代表的な絵画制作に利用されていることを明らかにした。江戸時代を通じた俳諧文化の拡がりにより、俳諧を愛好する受容層へ向けた絵画制作に、一蝶の画が時と場所を超えて積極的に活用されている様相を示すことができた。江戸時代絵画のあり方をより実態に即して捉えると共に、江戸時代絵画研究にとっての俳諧文化という視座の重要性を示すことができた。本研究は、殊に一蝶・一蝶画の受容史研究、『画本図編』を中心とした英一蜂、また白隠慧鶴、曾我蕭白らの画家研究に資する所が大きい。

以下では、研究成果についてより具体的に述べる。18 世紀以降の俳諧文化における画家・絵画の評価体系を明らかにするという「研究の目的」①の達成のためには、江戸及び上方の事例の検証が重要となる。「２．研究の目的」で述べた尾形光琳の他に、俳諧文化において高く評価されていたと想定される画家の内、特に重要なのが 17～18 世紀の江戸の画家・英一蝶である。彼については、江戸における 19 世紀までの評価について、俳諧文化への言及も含めた先行研究があるが、上方方面での評価に関する研究は皆無といえる。一蝶について本研究では、上方を中心とする地域に重点を置いて検討し、江戸と併せて、俳諧文化における一蝶・一蝶画観と評価の様相の総体を解明する。

まず、18 世紀前半の江戸における一蝶と光琳の活動について、論文「英一蝶と尾形光琳――一蝶晩年期の作風転換と光琳画意識―」で考察した。一蝶が晩年期に古典的・貴族的なものへ作風転換したことについて、江戸の大名家や富商という受容層において光琳を含む他の絵師と競合する中で、戦略的に行ったことを指摘した。一蝶が光琳の存在や作品を意識していた可能性を初めて具体的に示すもので、二大画家同士の関わりを視野に入れることはこの時代の絵画観の刷新につながる重要な指摘である。同論文では一蝶の大作《涅槃図》（ボストン美術館蔵）の注文主が冬木家四代目であるという、一蝶及び冬木家研究にとり大きな発見もなし得た。こうした一蝶や光琳の活動が、続く時代における彼らの評価へとつながっていく。

18 世紀半ばの江戸における一蝶評価と、江戸時代絵画への影響については、論文「白隠慧鶴による英一蝶作品の受容」を執筆した。禅僧・白隠慧鶴が複数の絵画作品において一蝶画を作画のヒントにしたという新知見を示した上、その背景として、18 世紀半ばの江戸の俳人社会で一蝶画が愛好されており、白隠が江戸において一蝶画を愛好する俳人達や一蝶の弟子・一蜂等と交流し、一蝶画を自作に取り入れた状況を具体的に明らかにした。同論文は、白隠や琳派等の研究者から、白隠や、江戸の俳人達に関わる琳派画家のネットワークを解明するものとして高い評価を得た。同論文の内容を元に、花園大学国際禅学研究所主催「白隠フォーラム」で研究発表予定である。

一蝶の上方方面での評価については、複数の論文を通じて検証した。本研究での成果として、英一蜂による一蝶の画譜『画本図編』の出版、及び蕪村の活動が、二つの柱として、上方における一蝶評価・受容に重要な役割を果たしていたことが示された。

まず、前者について、論文「英一蜂『画本図編』『英氏画編』の出版事情――板元・大野木市兵衛及び大岡春卜『和漢名画苑』に注目して」を執筆した。一蜂の模写による一蝶の画集『画本図編』は、宝暦 2 年（1752）に大坂の大野木市兵衛から出版されているが、これは同書肆から刊行された大岡春卜『和漢名画苑』に多くの一蝶画が収録されているのを一蜂が見たことにより企画されたと推定した。『画本図編』は板元・大野木市兵衛において、春卜等による正統的な画譜の姉妹編である異色な画譜としての役割を期待されていたことを明らかにした。また、一蜂による『画本図編』の出版意図なども併せ、当時、俳諧文化における一蝶画観が江戸と上方で共有されていたことも指摘した。同論文により、一蝶について、上記で明らかにした江戸における評価・影響に加え、上方方面での評価・影響の大きな部分を解明することができた。

加えて、『画本図編』出版は、江戸から上方、さらに伊勢へと一蝶画を普及させていることを示すことができる。本研究の初年度において、研究代表者は、論文「曾我蕭白と英一蝶」で、18 世紀の京都の画家である曾我蕭白が、一時代前の江戸の画家である一蝶の本画や、『画本図編』などの画譜に掲載された一蝶画を作画の参考にした諸例を指摘した。そして、それが蕭白の大画面絵画においては作画の便宜のためであるのに対し、掛幅画等の小画面絵画においては、蕭白による一蝶風作品の制作と見なせることを述べ、それは、俳諧を愛好する蕭白の受容者の一蝶画への需要に応えたものであると推定した。蕭白は俳諧文化との関わりが深く、彼が遊歴して作品を遺した伊勢や播磨の地方でも京都でも、俳諧関係の交友があった。当時の伊勢や上方・播磨では蕉門俳人による蕉風復興運動が盛んであり、松尾芭蕉との交流が知られる一蝶の画が、俳諧文化において珍重されていたことが考えられるとした。

論文「曾我蕭白による英一蜂『英氏画編』の利用」では、『画本図編』の続編で、一蜂の画集である『英氏画編』を蕭白が作画に利用したことを具体的に指摘し、利用のあり方を検証した。蕭白による『英氏画編』の利用は、彼の従来知られる様々な画譜の利用の仕方と同様、原本の筆者が誰かということへの意識はなく、図そのものへの着目に基づく使用であり、このことは、蕭白における、一蝶の名前を意識した一蝶画利用の特殊性を際立たせるものでもあった。

上記の論文「曾我蕭白と英一蝶」での解釈に対し、論文「英一蜂『画本図編』の周辺――五味

以則、青木桃渓、曾我蕭白」では、新たな発見に基づき新解釈を示した。『画本図編』の序文作者について、研究代表者は論文「英一蜂『画本図編』『英氏画編』の出版事情――板元・大野木市兵衛及び大岡春卜『和漢名画苑』に注目して」で、江戸の儒医・五味以則であることを指摘した。この度の論文では、多くが知られていない以則の行状について確認した上で、以則から親しく俳文指導を受けた伊勢久居藩士の俳人・青木桃渓の活動に注目した。桃渓が久居において一蝶画や『画本図編』の普及に関わっていた可能性を探る中で、若い頃の蕭白の伊勢における作画活動についての資料を新たに見出した。研究代表者は、蕭白が伊勢での作画に『画本図編』を利用していることを「曾我蕭白と英一蝶」で指摘したが、伊勢において桃渓らが同書を愛好していたことがその背景にある可能性を新たに提示し、研究を一段深めることができた。『画本図編』を通じて、江戸から上方、伊勢に拡がる俳諧文化における一蝶画評価の様相と画家への影響を明らかにすることができた。

上記の諸論文で検証した『画本図編』出版と並んで、上方における一蝶評価・受容に重要な役割を果たしたと考えられるのが、若い頃に江戸・関東で俳諧活動を行った後、京都・大坂で活躍した俳人兼画家である蕪村の活動である。これについては、論文「与謝蕪村の英一蝶評価――上方における一蝶画評価の様相」を執筆した。同論文は、一蝶歿後の俳諧文化における評価について、江戸・関東、上方、伊勢の事例をまとめた上で、蕪村による一蝶画評価についての検討を加えて総括したものである。同論文では、蕪村が江戸俳壇との結び付きに基づき、いわば江戸俳人の代理的な存在として、18 世紀後半の上方において、江戸俳壇の画家・一蝶というイメージと共に、一蝶画の俳諧的鑑賞を広め支える役割を果たしていたことを提示した。これにより、上方における一蝶評価について、江戸俳壇との関わりが深い俳人達によって担われていたことを具体的に示すことができた。

また、蕪村の弟子として知名度はあるものの、未だ個別の作品研究が少なく、画家としての研究も十分なされているといい難い呉春についても調査を行った。調査で得られた新知見に基づき、逸翁美術館の展覧会「池田市制施行 80 周年記念 画家「呉春」―池田で復活！」の会場用展示解説を執筆し、展覧会関連講座での口頭発表を行った。呉春の俳画作品を丁寧に分析することにより、蕪村や呉春周辺の俳諧文化の評価体系の一端を明らかにし、また蕪村とは異なる呉春の画家としての特徴を新たに提示することができた。

本研究では、成果として発表するに至ったのが 18 世紀までのものとなり、関係資料が一層膨大となる 19 世紀の様相については、検証作業は行っているものの論文等にまとめるに至らなかった。本研究期間中に得られた知見を元に、今後、19 世紀の事象についても学会発表や論文等の形で発表を行いたい。

〈引用文献〉

1. 馬渕美帆「十八世紀の俳諧文化における光琳評価――『光琳画譜』刊行まで」、『美術史論叢』31 号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室、2015 年、1-30 ページ

2. 馬渕美帆「伊藤若冲の歌仙図研究――寛政期の画業と俳諧文化――」、『國華』1450 号、國華社、2016 年、3-19 ページ

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 馬渕美帆	４．巻 38
２．論文標題 与謝蕪村の英一蝶評価――上方における一蝶画評価の様相	５．発行年 2024年
３．雑誌名 実践女子大学 美学美術史学	６．最初と最後の頁 61～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/0002000074	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬渕美帆	４．巻 37
２．論文標題 英一蜂『画本図編』の周辺――五味以則、青木桃渓、曾我蕭白	５．発行年 2023年
３．雑誌名 実践女子大学 美学美術史学	６．最初と最後の頁 61～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002398	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馬渕美帆	４．巻 38
２．論文標題 英一蜂『画本図編』『英氏画編』の出版事情――板元・大野木市兵衛及び大岡春卜『和漢名画苑』に注目して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 美術史論叢	６．最初と最後の頁 61～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 馬渕美帆	４．巻 73-1
２．論文標題 英一蝶と尾形光琳――蝶晩年期の作風転換と光琳画意識―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 神戸外大論叢	６．最初と最後の頁 51～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 馬渕美帆	4．巻 35
2．論文標題 曾我蕭白による英一蜂『英氏画編』の利用	5．発行年 2019年
3．雑誌名 美術史論叢	6．最初と最後の頁 141～165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 馬渕美帆	4．巻 1473
2．論文標題 曾我蕭白と英一蝶	5．発行年 2018年
3．雑誌名 國華	6．最初と最後の頁 3～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 馬渕美帆
2．発表標題 白隠による英一蝶作品の受容
3．学会等名 白隠フォーラム「英一蝶と白隠」（招待講演）
4．発表年 2024年

〔図書〕　計4件

1．著者名 山下裕二，由良濯，深山孝彰，春木晶子，馬渕美帆，しりあがり寿，佐藤晃子	4．発行年 2021年
2．出版社 曽我蕭白展実行委員会	5．総ページ数 232
3．書名 曽我蕭白　奇想ここに極まれり（執筆箇所：作品解説（No.1・3・4・11・12・14・39・45・52））	

１．著者名 板倉聖哲，髙岸輝，馬渕美帆，他	４．発行年 2020年
２．出版社 羽鳥書店	５．総ページ数 772
３．書名 日本美術のつくられ方――佐藤康宏先生の退職によせて（執筆箇所：馬渕美帆「白隠慧鶴による英一蝶作品の受容」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔口頭発表〕馬渕美帆「図様で「つながる」絵画」神戸市立博物館展覧会「つなぐTSUNAGU―THE POWER OF KOBE CITY MUSEUM」特別講演会（招待講演）2020年
〔展覧会会場用展示解説執筆〕逸翁美術館展覧会「池田市制施行80周年記念 画家「呉春」―池田で復活！」作品解説10件、テーマ研究パネル解説1件　2019年
〔口頭発表〕馬渕美帆「呉春vs俳画」逸翁美術館展覧会「池田市制施行80周年記念 画家「呉春」―池田で復活！」関連講座「呉春作品をめぐる絵画vs文学―イメージ×テキストのシナジー」（招待講演）2019年

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関